このぞんぞんな世界に救済を！

ちょむすけ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

回収した神器が暴走し、カズマたち御一行＋アイリスとクリスは日本へ。しかし、そこではなぜかゾンビが大量発生しており…

キャラ崩壊するかもしれないですがその辺はご容赦ください。後、原作最新刊までのネタバレを含みます

目次

プロローグ ―――――――― 1
この異世界パーティーに日本の家を！ 10
この薄幸教師に救済を！ ―――――― 20
学園に集いし者たちに紹介を！ ――― 28
このゾンビだらけの世界に爆焔を！ 41
このぞんぞんな世界で日常を！ ――― 52

プロローグ

『ターンアンデッド』『ターンアンデッド』『セイクリッド・ターンアンデッド』!!か、カズマさん。効かないんだけど、私の『ターンアンデッド』なんでかあのゾンビには効かないんだけど!?」

俺たちは今日本の大通りを思いっきり走り回ってた。

「カズマカズマ、ここはもう爆裂魔法で一網打尽にしてしまうしかないのでは!?」

「アホか!そんなことしたらもっと大量に集まってきて大変なことになるわ!」

「ああ、今あのゾンビたちに捕まったら、私は抵抗することも出来ず全身を隈なく蹂躙され…だ、だがどうなろうと私は騎士としての誇りは失わない!!いってくりゅ!!」

「行くな変態クルセイダー!そんなことしたらあの連中の仲間入りだぞ、自重しろ!」

「へ、変態、変態クルセイダー…くぅっこ、こんな時にそんなプレイを…」

「こんな時に感じてんじゃねえ!ほんっとにブレないなお前は!!最近はアイリスの前でも本性隠さなくなりやがって!!」

そして、逃げ回る俺たちの前方に敵感知スキルが反応する。

当然のことながらゾンビの群れ。

ちょっと危ない殺気を垂れ流すクリスとか、聖剣を抜きそうなアイリスとかも宥めつつ俺たちはとにかく走る。
「みんなそこの建物の中に取り敢えず飛び込め！中にゾンビいたら俺がなんとかするから！」
なんで俺たちが、日本にいて、なおかつこんなバイオハザードな状況になっているかというと…

「これが今回頼まれた神器です」
「ありがと、えっと一応確かめさせてもらうね」
お頭が神器の確認を済ませている間、俺たちは思い思い過ごしていた。
俺が魔王を倒した後、仮面盗賊団の神器回収の活動に王族というバックがついたので最近仮面をつけることも少なくなったから、少ししんみりしつつさっきクレアが淹れて行ったお茶を飲む。
「それはそうとお兄様、もう少しで私も結婚ができる歳なので…」
俺が魔王を倒した後から、アイリスが俺になんか積極的になってきたりもした。
「お、おう」

「何を言ってるんですかこの下っ端は。カズマは渡しませんよ?」
「お頭様、お兄様が魔王を倒した今となっては私とお兄様の間に障害はないのですよ。いえ、むしろ魔王を倒した勇者であるお兄様と結婚するのは私の義務であり、権利でもあります」
「フッ、何を言うかと思えば…今の私はとうの昔に親の公認を得た身。さらに私はもう結婚できる年です。その点で言えば貴女は私どころかダクネスにすら劣っているのです。そしてダクネスはバツ1ですから、どう見ても私が一人勝ちするにちがいありません」
「なっ、私はバツ1などではないぞ!」
「それは貴女が戸籍をいじったからでしょうが、私利私欲のためには権力は使わないとか言っときながらこの娘は」
「ぐぅっ、だがなめぐみん。私はカズマと一線を越える直前まで行ったのだぞ、具体的には押し倒されたことがある」
「その話はもう聞きましたよ。結局一線を越えようと誘ったのは貴女からだったと言うじゃないですか。それを何が押し倒されたですか、エロネス」
「誰がエロネスだ!!」
「ら、ララティーナその話を詳しく!」
!!!!!???

　ダクネスはその時のことをこと細やかに話す。あくまで自分が押し倒された風に話すダクネスは初めて会った時より大分小狡くなったもんだ。というかあの時俺にお前を押し倒したときは話をしたかっただけで一線を越える意思なんてもってなかったぞ
「…お前の家でお前を押し倒したのはお前と話すためだし、初めはそんな意思なかったぞ」
「でも結局流されかけたではないか」
「それはお前があんなこと言うからだし、それも結局お前がブチ切れてなかったことになったけどな」
「その程度のこと私もすぐに起こせます。今でこそカズマとは仲間以上恋人未満な関係ですが、その気になればすぐに上へ持っていけます」
「ふっ、だが忘れるなめぐみん。既にカズマのファーストキスは私のものになったということを」
　それを言ったあと、ダクネスは城の調度品に不用意に触ろうとしてるアクアを止めるために会話から外れた。
「それをいうなら私もキスなど済ませてます。結局のところ貴女が一番出遅れてるのですよ」
「むっ、私はお兄様に指輪をもらいましたし、この中では一番進んでいます」

「そもそも、私はあの時邪魔さえ入らなければ確実に一線を超えてました。この時点でアイリスでは届かない遥か高みにいるのですよ」

確かにあの時アクアの邪魔が入らなければそうなってただろう。

けど、俺が未だに一線を超えてないのはお前達が期待させといてお預けするからであり、そのせいで俺はサキュバスの店に行かざるを得なくなり、結果的に賢者モードになってその気がなくなるのである。

「お兄様は誘われればホイホイついていってしまうではないですか！それでまだ一線を超えてないのはめぐみんさんに魅力がたりないからなのでは!?」

「むむむ…なるほどどうしても負けを認めないというのですか…なら今日カズマを私の部屋に呼び現実というものを「させませんよ！」」

こうして、アイリスとめぐみんのじゃれ合いはヒートアップしていく。

これは長く続きそうだ。まあ、ほっといても大丈夫だろう。このままこの話に混ざってたら危ない気がする。

「お頭。そもそも、今回の神器はどういうものなんですか？」

「えっとこれは、日本から任意の物を召喚するってやつなんだけど。まあ、本来の使用者以外が使うと完全にランダムで出「お頭」」

「ダメだからね」
「ちょっとだけ、ちょっとだけだから！」
「ちょっと言い方！本当にダメだからね？日本っていうかあの世界の兵器がこっちに流れたりなんかしたら本当に危険なんだから」
「大丈夫です。仮にライフルとか出てもすぐ壊すくらいのことはします。そんなもんいらないんで」
　そう。魔王を倒した今、銃なんかはクソの役にも立たない。
　そんなものよりゆんゆんあたりに攻撃してもらった方がつよいし。
「じゃあ何が欲しいのさ」
「ゲームっすよ」
「もうお屋敷にいくつかあるじゃんか」
「いや、あんなドットのやつじゃなくて、ＰＳ○ＩＴＡとか３Ｄ○みたいな最近のが欲しいんですよ」
「えっなになに、その神器日本から物を呼び出せるの？ちょっと私に貸しなさいな」
　ああ、余計なのが出てきてしまった。
「だめだ。お前がこういうのに触ると大抵ロクなことにならないからな」
「なっ、この水の女神アクア様になんて言い草！謝って！神聖な女神様に生意気な口聞

いてすみませんって謝って！」
「おい、誰が神聖な女神だ。借金をこさえるのと宴会芸しか脳のない駄女神が。ちょっとはエリス様を見習え」
　こいつがこの世界に来て遊び呆けている間にも義賊として神器を回収してるエリス様とコレなんて比べるべくもない。
「この私があの上げ底エリスより下だって言ったわね！目に物見せてやるわ！っていうわけで貸しなさいよそれ」
「やめろ！本当にお前が絡むとロクなことにならないから！はな…はなせぇ！」
「もうこうなったら！」
　アクアが俺との取っ組み合いの中で力を込め始める。
　なんでこいつはこういうときだけ頭が回るんだろうか。
「アクアさんストップ、そんなに魔力込めたら暴走するから！」
「アクア、一旦落ち着け。貸してやるから落ち着け。本当にやばそうだから」
「ついに負けを認めたわね。いいわ見てなさい、私がここに貴重で金目の物を召喚してみせるわ」
「いいから魔力を流すのやめろこのバカ!!」
「アクア落ち着け、ここはカズマやクリスの言うことを聞いたほうがいい」

「カズマさんやクリスこそバカじゃないの？こういうのはね、魔力を込めれば込めるだけいいのが出るもんなのよ！」
「ちょ、本当に危ないですからやめてくださいアクア先輩！」
「えっクリス今先輩って」
そう言った瞬間、神器が光り始める。
「まあいいわ。さあ、来なさい。貴重でお金になりそうな物！若しくは日本酒！」
そして、光は部屋を包み込んだ。
なんかこの流れ見たことあるぞ、アクアが調子になった時は本当にロクでもないことが起こる。
きっとなんかとんでもないものが召喚されるに違いない。
「は？」
「…さあ来なさい金目の…はえ？」
「あああああもおおおお！」
「おいカズマ？これは一体どういう…」
「よし、さっきから私に喧嘩を売っているのなら買おうじゃないか！…は？」
「なんですか!?やるんですか!?いいですよ、王族は強いんですから！」
光が止んだ後、目に映ったのは高層ビル群。

きっとここは日本だろう。なんかビルとかボロボロになってるし、そこかしこに壊れた車やらが転がってたりもするけど…

「おいおい、これって逆に俺たちが召喚されたパターンなんじゃ…なんて事してくれたんだ、この駄女神!!」

「何よ！しょうがないじゃないの！こんなんになるなんて知らなかったんだから！」

「とりあえず謝れ！ここにいるみんなに謝れ！」

「ってカズマさん後ろ後ろ!!」

「はっ、騙されないぞそんな古典的な手に今更この俺が引っかかるとでも思ってんのかお前は！」

「いや、本当に本当だから!!」

「だからそんな手に今更引っかからないって、お前じゃあるまいし…ってなんだよ」

アクアに説教をしようとしてると俺の肩に何かの感触が…ってか今べチャって音しなかったか？

「オ〟オ”オ”オ”」

そして振り向いた俺の前にはそのままの意味で腐った顔があった。

というかゾンビである。

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

この異世界パーティーに日本の家を！

「ぷーくすくす。ねえ聞いたさっきのカズマ『ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』って、いつもは得意げに魔王を倒したってカズマさんって自慢してるくせに、ぷぷっ」

近場にあった一軒家に飛び込み中のゾンビをバインドでしばって適当な部屋に転がしたあと、潜伏スキルで隠れてなんとか一休まで来た時にアクアがムカつく顔でこっちを煽って来た。

ってか、潜伏スキルが効くってことはアンデッドじゃないってことか。

「さっき逃げてる時に浄化魔法が効かないって泣き喚いてた駄女神は放っておいてだ。これからどうしようか」

「ちょっと誰が駄女神よ、このヒキニート！」

…マズイことになった。俺たちが日本に来ちまったのはいい。

あと、なんか日本が映画みたいな大事件に巻き込まれてバイオハザード的な世界観になってるのもまあ、一万歩くらい譲って良しとしよう。

そう考えながら俺はアイリスの方に目を向ける。

「どうかしたのですか、お兄様？」

これって帰ったら俺がまた国家転覆罪みたいなのに処される案件なんじゃないだろうか。
「マズイぞカズマ…アイリス様が私たちに巻き込まれたのは本当にマズイ!!」
「これ帰ったら確実に牢屋にぶち込まれるパターンなんじゃ…」
そんな心配をしながら俺たちが顔を真っ青にしてると。
「大丈夫ですお兄様。お父様にちゃんと言っておきますから……これはただ単に魔王を倒した勇者様とお供を連れて婚前旅行に出ただけだと」
なんていい妹なんだ!後半はよく聞こえなかったが、アイリスがどうにかしてくれるらしい。
「な、何を言ってるのですか貴女はっ!本当に最近はカズマみたいに手段を選ばなくなってきましたよこの娘!」
「…そろそろこれからどうするかを考えようよ、まだ帰る方法すらもわかってないんだし」
「それもそうだな、よし帰った後のことは帰った後に考えよう」
うん。今までもどうにかなって来たんだ、きっと今回もなんとかなる。
もし仮に、殺されたとしても『リザレクション』で蘇生してもらえば問題ない。
「で、とりあえずだけど学校を目指そうと思う」

「学校…？なぜだ？」
　ダクネスが聞いてくる。まあ、あの世界は教育制度がまだあんまり広まってない上に、自然災害があんまり怒らないからな。
「いやこの国な、割とシャレにならないような大災害が割と頻繁に起こるんだよ。で、学校なんかはその避難所によく使われるんだ」
「なるほど…この国ではこんな災害がよく起こるのか…恐ろしいな」
　そう言いながら、ダクネスは窓の外に目を向ける。
「いや、さすがにこんな災害はそうそうおこらねーよ。巨大な地震が起こってその地域が壊滅したりってのがたまにあるくらいだ」
「いや、それもそれで問題だろ！」
「だから災害時の決まりごとがしっかりしてんだよこの国は」
「なるほど…我が国でもそういう避難所のようなものを作った方がいいかもしれませんね」
「学校を目指すのはいいのですが、そもそも道はわかるのですか？」
「それは問題ない。なんせ俺この辺りに住んでたし道はわかる」
「なんと！カズマが育った街なのか、ここは！」
　そうやってなんだかんだと説明してるとクリスが沈痛な面持ちで話しかけて来た。

「じゃあ助手くんの実家とかも寄った方がいいのかな」
「いや、いいです」
　それは本当に勘弁してほしい。
「な、何を言ってるんですかお兄様！ご両親が心配じゃないんですか!?」
「そうですよ！カズマは世間では鬼畜だのクズだのと言われていても人並みの情はあると思ってたのに！」
　いや、そうじゃない。今の言い方だとそうとも取れるだろうがっていうか今世間で鬼畜とかクズとか言われてるって言った？何？そこまで広まってんの？
「いやそうじゃなくて！生きてるならどこぞに避難してるはずだし、もし家にいたら絶対あいつら見たくなってるって。いくら鬼畜とか言われてる俺も親のゾンビとか見たくないぞ？」
「そうですか、それもそうですね。ええ私は信じていましたとも！」
　おい。お前さっき散々俺をこき下ろしてただろ。
「で、一番近い避難所が学校だから家族探すついでに行こうってことだね」
　まあ、親と弟が生きてたとしても、俺はもうこの世界では死んでるからそれはそれでめんどくさいことになるだろう。
　親がいた時の言い訳とか考えた方がいいんだろうか。

「じゃあ学校は明日行くってことで、とりあえず家の中で食えるもの探すぞー。あとそこの冷蔵庫…でっかい箱は絶対に開けるなよ、フリとかじゃないからな。絶対後悔するからな！」

さっき、ここの電気が付くか一応試したがやっぱり付かなかった。

つまり、あの冷蔵庫の中身は…やめよう。想像するだけでも口からクリエイトウォーターしそうだ。

「……あんまいいのねぇな。間違いない、この家地震が起きたらまず間違いなく食糧難に喘ぐことになる」

「そうなったから、この家の中でゾンビになってるんじゃない？」

「そもそも、この世界のゾンビってどうやって増えてんの？」

「それはあれじゃないオーソドックスに噛まれたら仲間入りってことじゃないの？」

「それだけじゃここまで爆発的に広がってねえだろ、下手したら空気感染するんじゃ…」

「……」

「……」

「帰して！今すぐ私を向こうに帰して！こんなしょうもない理由でこのアクア様がゾンビになるとか絶対嫌よ!!」

「そんな方法知ってたら今頃もうやってるわ!!まあ、お前いれば蘇生も解毒も出来るか

ら万が一ゾンビになってもなんとかなるだろ、俺も一応回復スキルいくつか使えるし」
「それならまあいいわ……あ、こんなところにウィスキーが!!」
「おい、それは今飲むなよ、さっき見つけたバックの中に入れとけ」
「なに？これが欲しいの？あげないわよ。もし欲しいんだったら私に忠誠を誓いなさい。そして敬って！敬って甘やかして！」
　こいつはこんな非常事態になにを言ってんだろうか。
「ほーん、なら勝手にしろ。言っとくけど二日酔いになってぶっ倒れたら容赦無く置いてくからな」
「ぐっ、わかったわよ。だけどこれは私のもんだからね！」
「そうだな。お前が手に入れたその酒はお前の物でいいよ」
　そう。アクアが手に入れたものは。よし、これから何か手に入ってもアクアに分けなくていい大義名分が手に入った。
　こいつは、この世界にいる以上、こういう酒とかの嗜好品を一番安全に手に入れられるのが、敵感知や暗視、潜伏などのスキルを全て兼ね備えた俺だということを忘れてるらしい。
「お、焼き鳥缶発見。それも結構たくさんある。おっこっちには酒が！」
「へーいいおつまみになりそうね！それにお酒が増えるのはいいことよ！」

　こいつはつい数秒前に自分が行ったことを忘れたらしい。
「おい。こいつはやらねえぞ。お前がさっき言ったんだろうが、手に入れた物は発見者の自由にしていいってな」
「カズマさん、そんな量のお酒を一人で飲むのは現実的じゃないわ、それはみんなでわけるべきだと思うの」
「そうだな、だからこれはダクネスやクリスあたりと一緒に飲もうと思う。お前はその手に持ってるウィスキーをチビチビ一人寂しく飲んでるといい」
　そう言って俺がドヤ顔で言うと。
「ごめんなさいカズマさん!!このお酒はみんなでわける事にするからどうか私にもお慈悲を!!」
　おい。お前は寧ろ慈悲を与える側だろうが。
　結局また他の連中にチョロいだの言われるかもしれないが、まあいい。なので。
「しょうがねえなぁーー！」
　渾身のドヤ顔で言ってやった。
「カズマカズマ！」
「はいカズマです」
「この大きな黒い板のような物はなんですか!?」

「これはテレビって言ってな。色んな映像番組を見ることができるけど、電気通ってないからなんの役にも立たないただの板だ」
「カズマ！」
「カズマだよ」
「こ、こんなところに何故かムチやロープ、さらにはなにに使うかわからないが、ブルブル震えるいかがわしい形をした何かがあるのだが！持っていってもいいだろうか!?」
「最後のは絶対置いてけ！」
　この家の住民の片方はダクネスと同じ性癖してるのか。
　流石に置いて行かせよう。アレをアイリスに見せるのはまだ早い。
「それはそうとカズマさん」
「あのバインドで縛ったまま放置してあるアレ、どうするの？」
「ええ。それは私も気になってました。いつものカズマだったら、バインドで簀巻きにした上で捨てると思ったのですが」
　アレとはすぐ近くで呻りながら縛られてるゾンビである。
「ああ、コレな。後で使い道があるから取っといた」
「しかしカズマ、こうもずっと不気味な呻き声を上げられてはこちらも気味が悪く感じるぞ」

「なんだ、怖いのかララティーナ」
「なっ、私とて冒険者だ。この程度怖くなどない。ただの彼らがいたたまれないと…というか、その名前で呼ぶな！」
「いいじゃないかララティーナ、かわいいぞララティーナ！」
「くぅぅぅ」
　ダクネスが顔に手を当てて蹲る。
「む～～～～！」
　おっとアイリスもこっちをジト目で睨んできた。ダクネスを揶揄うのはこの辺にしておくか。
「で、その使い道とはなんですか？」
「いや、俺今から初級魔法を大量に使うわけだ。水道が止まってるからクリエイトウォーターは必須だし」
「そうですね。今のカズマはなくてはならない存在です」
「そうだろ。けど初級魔法とはいえ乱発したら魔力ステータスが低い俺は魔力切れをすぐに起こしてしまう」
「まさか…」
「そうだ！ここにいるゾンビから『ドレインタッチ』で魔力を吸った後で捨てる。なかな

かできてるだろ！」

まさに完璧な作戦！難点があるとすればこの腐ってる体に触りたくないってことだ。

「うわ～、流石鬼畜のカズマだわ。既にそんな体になってる死人にさらに鞭打つなんて」

「うるせえ！しょうがねえだろ、この世界にマタナイトとかそういう便利なもんがないんだから！俺だって触りたかねえよこんなの！」

「理由が分かったが、せめて彼らを別の部屋に運ばないか？流石にそれを見ながらなにかを食べるのはちょっとな」

「ま、そうだな。いい加減呻き声もうるさいし。よしダクネスそっちのゾンビ持っていってくれ」

「わかった」

「よし、そんで戻ってきたら飯にしよう！」

飯を食った後、ドレインタッチで魔力を戻した俺は出涸らしになったゾンビを家の外に捨てて寝た。

この薄幸教師に救済を！

「よし、出涸らしになったゾンビもきっちりトドメを刺して埋葬したし、そろそろ行くか」

昨日魔力を限界まで吸い取った夫婦っぽいゾンビをこの家の庭に簡単に埋葬した。

流石に、あのまま放っておくほど俺はクズじゃない。ホントだよ。

「おい、お前らなんだその目は」

「いえ、カズマにもちゃんと人の心があったのですね。安心しました」

「うん。昨日の魔力タンクがわりって発言にはだいぶ引いたけど、カズマさんが最低限の人の心は持ってることを確認できてよかったわ」

こいつら。

「お前らは俺のことなんだと思ってんだよ」

ムカついたのでめぐみんとアクアの頬を引っ張って半泣きにさせつつ話を続ける。

「話を戻すけど、移動中は潜伏スキルを使ってる俺やクリスから手を離すなよ？特にそこの三人」

「おい、なんだその目は。私がそんなことをするとでも思っているのか」

「お前昨日あのゾンビの群れにだらしない顔しながら突っ込もうとしてたよな」
「してない」
ダクネスは目をそらしつつ言った。
「お前らが問題起こしたら本当に置いてくからな」
俺はリュックを手に持つ。昨日回収した酒類も忘れない。
「ここから少し歩くがなるべくゾンビとの戦闘は避けてくぞ。もし囲まれてどうしてもやばくなったらアイリス、頼む」
「はい。任せてくださいお兄様！皆さんは私が守ってみせます」
この面子の中で最年少ながら恐らく一番強いアイリス。
そしてアイリスの攻撃で撃ち漏らしたのを俺がすかさず『狙撃』するわけである。
「じゃあ行くぞ。なんか一雨来そうな雰囲気だからなるべく急いで」
そうして、一時間近く歩いた後ようやく学校にたどり着いた。
今現在雨が降っている。というより出発して数分したあたりから降り出してた。
「着いてすぐで悪いけど、引き返すか」
「なっ、ここまでいってなにをいってるのですか」
「いや、あんなん入れるわけねーだろ！」
目の前の学校の校庭にいるゾンビは、昇降口に殺到している。

つーかあんなになっても雨に濡れるのは嫌なのか。
「中にいるかもしれない生存者はどうするのですか！この世界のこの国の人は戦う力を持たないっていったのはカズマではないですか！」
「いや、だってこんなになっても悲鳴の一つも聞こえないんじゃ誰もいないって」
『きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ!!!???』
俺は耳を塞ぐ。
「カズマ、今思いっきり悲鳴が聞こえたと思うのだが」
「いや気のせいだ、俺は何にもきいてねぇ！」
「なにを往生側の悪いことを言っているほら行くぞ！」
「いやだ。あの中に突っ込んでってみろ、多分俺はまた死ぬだろ。いつもみたく即死するならともかく、全身噛みつかれつつ死ぬとかやだぞ。みんながみんなお前みたく変態じゃないんだよ！」
「くぅっ！こんな時にこんなプレイを！せめて時と場所を選べ！」
「お前こそ時と場所を選べ！このド変態が!!」
ダクネスと言い合いをしているとめぐみんが、袖を引っ張ってきた
「カズマ、本当に見捨ててしまうのですか？もしかしたら、悲鳴の人はこのゾンビ大量発生の原因を知ってるかもしれないのに」

「ぐっ」

確かにそうだ。情報は大事だ。

「それにカズマはなんだかんだ言いつつも、こういうのは見捨てられないのでしょう？」

「カズマは素直じゃないもの。素直に助けに行くって言うのが恥ずかしいのよ」

「お兄様、いきましょう！」

アイリスが期待に満ちた目をしている。

そして、アクアとダクネスとめぐみんとクリスはこっちをニヤニヤしながら見てくる。

後の四人は後で泣くような目に合わせてやろう。

「しょうがねえなあああああ！」

そう言いつつ校庭に向かって走り出した。

「まずは目の前の大群をアイリスに吹っ飛ばしてもらって校舎に突入。あとは潜伏スキルと敵感知スキルを使って生存者の捜索だ」

そして、指示を出してすぐにアイリスが聖剣を抜き、

「『エクステリオン』！」

目の前のゾンビを消しとばした。

「うん。流石だなドラゴンスレイヤー。ゾンビが跡形もなく消し飛んだ」
「その呼び方はやめてくださいお兄様…」
「よし行くぞお前ら！」
「「「ええ（はい）（うん）！」」」
そうして、校舎の中に入って生きてる人を探す。
まあ、すぐに見つかった。
「大丈夫か!?」
ダクネスが、ピンク色の髪をした人に駆け寄ってく。
ピンク色の髪の人はこっちを見ると少し驚いたように…。
「あの…此方に避難されてきた…生存者の方ですか？私は、みての…通りもうだめです。上の、階に、まだ生徒が三人、います。お願い…します。あの子たちのことを…」
ゾンビに噛まれた傷を抑えつつ必死になりながら俺たちに言葉を伝えてくる。
おかげで、話しかけた後のことをする機会を見失った。
「ああ…もっとあの子たちと一緒に…生きたかったなぁ」
うん。この流れは前にも二回ぐらいみたな。
「あのすみません……」
それは空気の読めない子が放った魔法。

「『セイクリッドハイネスヒール！』」

「……」

こういう流れが初めてなアイリスや、本当の女神であるクリスと魔法を掛けたアクア以外がニヤニヤしつつピンク髪の女の人を見る。

そう宴会芸と回復スキルだけが取り柄のアクアがいる以上よっぽどのことがない限り死なないし、死んでも復活できるからこの後の展開もいつもと同じだ。

「え…？あれ？急に苦しくなくなっ…た？」

ピンク髪の人はなにが起こったのかわかってないみたいだ。

「これでもう大丈夫よ！よかったね！これでまたあなたの生徒と一緒に生きていけるわよ！」

全く悪意はない嬉しそうなアクアの声。

何となく自分が助かったらしいことをゾンビの噛み跡一つない無傷の体を見て察したらしい女の人は

「……」

ニヤニヤしてる俺たちの顔を見て顔を真っ赤にして蹲った。

「ってこんなことしてる場合じゃねえ！」

敵感知スキルが近くで反応したことで状況を思い出した。
俺たちが吹っ飛ばしたのは入り口にいるゾンビだけで中にいるゾンビは潜伏スキルでやり過ごしたことを。
そして、潜伏スキルは当の昔に解けていて、十メートルくらい離れたところにはゾンビが数体。
「そこの人、取り敢えず移動するぞ、そこの人も恥ずかしがってないで立ってくれ！」
「あっそ、そうですね！こっちです！」
そうして俺たちは走り出し、
「あ、前からもきてますよカズマ！」
「しってるよ、バインド！」
前から来るのをバインドで捕まえて、ドレインタッチで魔力を吸い取る。
『クリエイトウォーター』からの『フリーズ』！」
そして後ろから来るゾンビをいつものコンボで転ばせてからの…
「はっはっはー！バカめ！『バインド』！」
意気揚々とさらにバインドして転がしておいた。
適当に時間置いたら取りに来よう。
というかこいつらはなにを食ってるんだろうか？

いっそ何もせず餓死されるくらいなら先に魔力とか吸っといた方がいいかなとか思ったが取り敢えず安全第一で逃げることにする。

アクア曰くこのゾンビたちはもう魂がどっかいってしまってるから『リザレクション』しても意味ないとのことなので何の容赦もする気は無い。冒険者とはそういうもんだ。俺だけがこうなわけじゃない。

「うわー、カズマさんいくらゾンビだからって女の子を縛りあげるのはどうかと思うわー」

「おい、流石に俺でもゾンビ相手に欲情したりしねえよ。あれは後でドレインタッチで魔力と体力を回収するためのバインドだ」

「しかし、カズマは安楽王女相手にも欲情してましたからね。本当かどうか」

おい。

「ふざけんな！あんな腐り落ちた死体もどきに誰がムラムラなんてするか！あれに比べればアクアの方がほんのちょっとくらいはマシだ！」

「ちょっと、ほんのちょっとだけマシってどういうことよー！」

「あ、あのそんなに大きな声で騒ぐと彼らが集まってきてしまうので……」

すいません。

学園に集いし者たちに紹介を！

めくねえええええ！と泣き叫びながらピンク髪の人に抱きつく制服の女子二人とやたらニコニコしてる、話聞いてたらどうやらさっき助けためぐねえが死んだと思ったショックで頭がおかしくなってしまったらしい、ロリ体型の高校生を横目で見つつ俺はこの後どうしようか考える。

「どうかしたのか、カズマ？珍しく考え込んでるな」

「いや、どうしたもんかって思ってなー」

「…？学校に着いたし、命を失いかけてた人も救えた。これ以上何を心配することがあるんだ？」

「俺たちのことどう説明すんだよ」

「どういうことだ？」

今、あの大泣きしながら再会を喜んでいる連中が正気に戻ったとしよう。

そして、俺たちの姿を見れば怪しいしか思えないはずだ。

それに、

「正直に説明したとしても、おまえ異世界から来たなんて言ってる初対面の連中を信じ

られるか？」
「ああ…」
ダクネスは察したらしい。基本的に変態なのを除けばそれなりに優秀だったなコイツ。
「きっとあれだ初めて紅魔族にあった奴とおんなじ目してくるぞあいつら」
「ああ。けど私は素直に話した方がいいと思うぞ」
「なんでだよ」
「私たちはいつもこういうので無駄な回り道をしてロクな目にあったことがないだろう」
馬鹿正直に向かってってもロクな目に合わなかった気がするが、まあいいか。
「じゃあ素直に言ってく方針で」
クリスあたりの『スティール』でなんとか信じてくれるはずだ。
俺がやったら多分またパンツを剥いてしまう。
アクセルの街なら俺がパンツ剥いても良かったんだが、流石に女ばっかりのこの状況でそれをやるほど俺は面の皮が厚くない。
その後冷静になった三人は俺たちの前で大泣きしたからか、顔を赤くしながら俺たちから事情を聞き出そうとしてきた。

ちなみにあの現実が認識できてないロリ体型の帽子被った娘はアクアの宴会芸に夢中である。
「先ほどは助けていただいてありがとうございました。私は巡ヶ丘高校の教師、佐倉慈と言います」
「あ、ご丁寧にどうも俺は佐藤カズマって言います」
「え……？」
あれ、思ってた反応と違う。もっとこう警戒心が強くなるんじゃないかと思ってたんだが。
腰に刀ぶら下げたやつ見たら普通警戒するんじゃ…。
「え……!?…つもそっくりだし…本人だとしたら余計おかしい…」
なんかこの人俺のこと知ってるっぽいわ。ついでに俺が死んだことも知ってるらしい。
「えっと…佐藤くんだったわよね…？あなたこの学校に通ったりしてなかった？」
俺はこんなまともな美人の知り合い居ただろうか。
周りがおかしい分知ってたら絶対忘れそうにないんだけど。
「はい。つってもほとんど家に引きこもってたんで、通ったのなんて数えるくらいですけど」

「……えええええええええええ!!!!????」
「ど、どうしたんだよめぐねえ。もしかしてコイツのこと知ってんのか?」
「ええ。でも彼は二年前に亡くなってるはず…」
「おいおいマジか…?」
「だって私当事のあの子の担任だったんだもの」
ああ、なるほど。だから俺は知らなかったのか。俺教師が家に来た時とか居留守使ってたし。
「カズマ、どうやらあの人カズマのこと知ってるみたいなのですが」
めぐみんやダクネスそれにアイリスにも一応俺が死んで転生したあたりの話は話してある。
だから俺が死んだ云々は飛ばしてくれたのだろう。
向こうで俺が割としょうもない理由で死んだりするからってのもあるかもしれないが。
「らしいな」
「なんでカズマは覚えてないんですか」
「学校サボりまくってたからな」
「そういえば前にカズマは引きこもって学校にも行かずにゲームばっかりしてたと言っ

てましたね…ほんとになんでこんなのを好きになってしまったんだか」
　こいつはなんでちょいちょい心臓に悪いことを捻じ込んでくるのだろうか。
「ってことはおまえは幽霊なのか!?」
　ツインテの女子が怯えたようにこっちを見て来た。失礼な俺は正真正銘人間だっての。
「いやちげえよ。結論を急ぐなって、ていうかクリスなんでおまえまで俺をアンデッドを見るような目で見てんの？」
　少し、真後ろの女神から殺気を感じた。
「いや、助手くん夜になると凄く強くなるからさ…ほんとに悪魔とかアンデッドじゃないんだよね？」
「いやですねお頭。あんた俺の事情だいたいアクアの次くらいに知ってるじゃないですか」
「ま、そうなんだけどさぁ」
「で、そこんとこどうなんだよ」
「説明はするけど、かなり突拍子もない話だぞ」
「それを言ったら今この世界も相当突拍子もない世界よ」
　そこから俺はあそこで宴会芸をしてる駄女神によって異世界に転生したこととかを

今までの苦労に対する愚痴や、クリスや俺のスキルの実演を含めながら説明した。
いくらコイツが言い出したことといはいえ、なんで俺は実演の相手にコイツを選んだんだろうか。
一応クリスがアイリスの目と耳を塞いでるが…最近コイツ、アイリスの前でもドMを発揮するようになってきてるな。
「か、カズマ。おまえ…バインドで縛り上げた上に放置とはなかなか高度なプレイを…くぅっ」
「おまえはほんとにちょっと黙ってろこのド変態！いい加減にしないとおまえが泣いて謝るようなことをしないといけなくなるぞ」
「くっこんな初対面の者たちの前で『スティール』で裸にされた私はきっとおまえに襲われ…くぅぅそれもまた…いいだろうどんと来い！」
顔を赤らめたダクネスはバインドで縛られたまま悶えている。
いいだろう。そういうことならこっちにも考えがある。
「なあ、そこの三人…ちょっと引くなって、何もしないから。この床で転がってるドMのことはこれからララティーナと呼んでやってくれ」
「え、ええ？」
「そ、それはやめろ!?こんな辱めは私の望むところではないと前から……っ！」

「あ、あの～そろそろ話を戻さない…？」
「そ、そうだな」
そう言って、悶えながら床に転がってるダクネス以外は話に戻る。
「で、異世界云々はわかったし一応信じるけど…その人そのままでいいのか？」
「お、お構いなく！」
因みにダクネスの痴態はクリスがアイリスの目と耳を塞いでいるので見えていない。
だからか、存分にその性壁を発揮していた。
「そろそろ自己紹介しないかしら、私たちは今日あったばっかりなわけだし」
「それもそうだな」
そう言いながら俺はちゅんちゅん丸でダクネスのバインドを切る。
こいつに使ったのはただのロープなのですぐに切れた。
「あぁ…」
「おい。なに惜そうな顔してんだおまえは。アイリスの前であんな痴態を見せるつもりかよ」
自己紹介する以上、クリスにはアイリスを離して貰わなくちゃならないってのにこの変態は。
まあ、色々手遅れなきがするけど。

「むぅ。そうだな済まない。下手をしたら手遅れになるところだった」
「安心しろ。もう色々と手遅れだから」
「どこにも安心できる要素がないんだが！まさかアイリス様は知っておられるのか!?私のコレを！」
　こいつは昨日ゾンビから逃げる時散々やらかしておいてなにを言ってるのだろうか。
「はぁカズマ、もうすでに脱線しかけてますよ。ダクネスが変態なのは今更でしょうに。ダクネスもさっさと起き上がってください」
　ダクネスが起き上がり、クリスもアイリスの目と耳を離した。
「あ、あの何が一体どうなったんですかお兄様？」
「今から自己紹介するんだよ。それじゃあ先ずは俺から。俺はさっきも言ったけど佐藤カズマだ。アクセルって街で大富豪になったり、魔王倒したりした冒険者だ」
「ちなみにカズマは私たちの街では、鬼畜のカズマ、クズマ、カスマ、あと運だけのカズマさんなどと呼ばれている、金があると部屋から出ずにダラダラと日がな一日過ごしてるダメ人間だ」
　おい。余計なことを言うんじゃない。
　皆が引いてるだろうが
「とはいえ、こいつは小心者の癖して魔王の幹部を相手取り、私を悪徳貴族から救ってく

れたりと存外にお人好しでいい奴だから偏見など持たずに接してやってくれ」
　こいつ、さっき名前のことで揶揄った意趣返しをここぞとばかりにしてきやがった。
　しかも、ほとんど事実だから言い返せねえ。
　悔しいっ！
　めぐみんやクリスまでこっちをニヤニヤしながら見てやがる。
「あと私の名前はダスティネス・フォード・ララティーナという。私のことはダクネスと呼んでくれ」
「あ、私はクリスだよ。冒険者で職業は盗賊。よろしくね！」
「私はアイリスと言います。向こうの世界では王女をやっています。よろしくおねがいしますね皆さん」
　アイリスはこっちの世界に自分の国がないって知ってるからか正体を隠そうともしないな。
「ああ、よろしく…って王女!?」
「なになに？みんなで自己紹介してんの？ちょっとこのヒキニート！なんで私を真っ先に呼ばないのよ！」
　あそこで宴会芸に興じていた駄女神が戻ってきやがった。
「ねえねえくるみちゃんあの人すっごいんだよ！紙でこんなの作っちゃったんだよ！」

「なんだこれ!?すごいな、どうやって作ったんだ…?」
そう言って帽子の女子が見せたのはいつしか城でも作ってたバニル仮面だった。
あいつはこういう役に立たないことはほんとに器用だな。
「私はアクアよ。アクシズ教のアークプリーストというのは世を偲ぶ仮の姿でその正体は私こそがアクシズ教の神体である女神アクアなの！わかったらこれからできるだけ甘やかしてちょうだい！」
「こいつは甘やかすと調子に乗るから適度に厳しくしてやってくれ」
「なんでよ!!」
「おい。今この状況こそおまえが調子に乗った結果だって忘れてないだろうな」
「なっ、そもそもあの神器を使ってみようとか言い出したのはカズマさんじゃない！何罪をなすりつけようとしてるのかしらこのニートは。謝って！罪をなすりつけようとしてごめんなさいって謝って！」
こいつ。
「おい、俺はおまえが魔力込め始めた時に止めたよな。それをこういうのはたくさん魔力を込めた方がいいのが出るのよ！とかいって調子に乗ったおまえのほうが悪いに決まってんだろこの駄女神！」
そう言いながら俺はアクアの頬を引っ張ってやった。

「あ、やめなさいよこのクソニート！あ、いたい、いたい！ちょっと引っ張るのは卑怯よー！」
「次は私の番ですね」
　そういいながらめぐみんは、俺たちの中心に位置する場所にわざわざ移動して名乗りを上げ始めた。
「我が名はめぐみん！紅魔族随一のアークウィザードにして、爆裂魔法を操る者!!」
　あ、あの三人が固まった。
　まあ、そうなるよな。
「あの…めぐみんってそれ本名か？」
「おい、私の名前について言いたいことがあるなら聞こうじゃないか」
「え、だって…さすがにあだ名だろそれは」
「紅魔族ってのはみんなこういう名前してるんだよ。決してふざけてるわけじゃないぞ」
　俺はアクアの頬を引っ張りながら助け舟を出してやる。
　アクアが泣きながらなんか言ってるが俺には聞こえない。
「なっ、カズマまで何をいうのですか！私からしたら外の人たちの方が変な名前してると思うのです」

「いや、俺の刀にちゅんちゅん丸なんていうわけのわからない名前をつけるおまえのセンスの方がおかしいからな。この刀の名前をかっこいいって思うのは紅魔族だけだ」
　ほら見ろ、ツインテのやつもめぐみんのことを微妙そうな目で見てる。
「そ、それじゃあ気をとりなおして…私は巡ヶ丘高校三年の若狭悠里です。えっと…私もなにかやった方がいいのかしら？」
　なんもやらなくていいです。これ以上は捌けないから。
「えっと、私も自己紹介したいんだけどさ…佐藤だっけか？」
「おう」
「その人そろそろ離してやれよ。めっちゃ泣いてるぞ」
「おっと忘れてた」
　言われて気づいた。
　そういえば俺アクアの頬を引っ張ったままだった。
「わあああああ!!カズマにいじめられたー!!」
　解放されたアクアはダクネスに泣きついた。
　よし、あいつのことはダクネスにぶん投げてしまおう。
「よし。邪魔者は消えたし、自己紹介の続きしよう」
「容赦ないな…」

「お兄様、あんまりアクア様を虐めてはダメですよ？」
「アイリス、あれはアクアが余計なことをしたから折檻してたわけで俺は悪くない」
「お兄様……」
「おい王女様が引いてるぞ……まあ、いいか。恵飛須沢胡桃だ、よろしくな！」
「私は丈槍由紀だよ！よろしくね！」
　おお!!
「どうしたんだ？なんでそんな目を輝かせてるんだ？」
「いや、普通っていいなって」
　そういいながら、俺は駄女神と頭のおかしい爆裂娘、ドＭクルセイダーを順にみる。
「おい。そこでどうして私を見たのか聞こうじゃないか！」
「いや、自己紹介に関してはおまえが一番おかしいからな」
　おっと、めぐみんの目が紅く輝き出した。
「なんていうか…苦労してんだな」
「ほんとだよ」
「えっと、改めて佐倉慈です。よろしくね、みんな」
　改めて自己紹介をした佐倉さんだったが、そもそも俺たちの中でちゃんと聞いてたやつはアイリスとクリスくらいしかいなかった。

このゾンビだらけの世界に爆焔を！

「カズマカズマ」
「あ？どうしためぐみん」
「そろそろ爆裂魔法が撃ちたいです！我慢の限界なんです！もう三日も撃ってないのですよ!!？」
　確かにめぐみんにしては爆裂魔法を三日もがまんできたのは凄いことなんじゃないかと思う。
「ちょうど校庭のところにわらわらと集まってますし、撃ち込んでいいですか！」
「却下に決まってんだろ」
　そんなことされたら昨日雨が止んだあと即席で出涸らしのゾンビ数十体を積み上げフリーズで作り上げたバリケードがパーになる。
　因みにバリケード自体はそこまで苦戦することなくできた。
　ある程度のゾンビが散ったあと。残ったのをバインドで縛り上げて、魔力と体力をもらって出涸らしになったのはバリケードの材料にしたわけだ。
　唯一の難点はといえば夏に入りかけてる今の気温だとそんなに長く持たないことだ。

「なっ…では私のこの爆裂欲はどうやって晴らしたらいいのです！」
「心配するなって。おまえが爆裂魔法を撃ち込むべき場所はもう見つけ出してるから」
「それ本当ですか!?」
「おう。だから飯食って少しダラダラしたら行くぞー。あとついでにダクネスも付いてきてくれ」
「私もか？」
「ああ。おまえにもやってもらいたいことがある」
　そうやって話がまとまりかけた時。
「ちょっと待って！」
　佐倉さんが俺たちに焦ったような顔で言ってくる。
「貴方達まさか外に行く気なの!?」
「行くけど？」
「何考えてるの！外は彼らがいっぱいいるのよ！」
　この人は今更何を言ってるのやら。昨日話したことを既に忘れているらしい。
　周りにゾンビが溢れてる？向こうでも爆裂散歩に行くときにモンスターに遭遇することなんてしょっちゅうだし、ぶっちゃけた話しいつもより周りに出る被害に気をつけるだけであとはいつもと変わらない。

敵感知と潜伏があればゾンビなんて怖くないんだよ！
「おいおい今更何をいうのやら、俺は今までに数多の魔王軍幹部や賞金首を相手にして、ついには魔王すら倒したカズマさんだぞ。ゾンビなんざ怖くねえし、むしろ魔力の予備タンクとして道中のゾンビを逆に襲ってやるわ！」
正直に言って触ったときにベチャってなる腐った体に触りたくはないがここにはマナタイトとかないからしょうがない。
「ねえねえカズマさんあなた今最高にゲスい顔してるわよ」
「助手くんは敵感知と潜伏以外にも千里眼とか色々持ってるしね」
「それにお兄様は城の騎士や腕利きの冒険者達を手玉に取った正義の盗賊でもあるんです！それはそれとして、そのお散歩には私も付いて行っていいでしょうか？」
「今日はアイリスはここでゆっくりしててくれ」
そうですか、とアイリスがしゅんとした顔をして、俯いた。
やばい。なんか、心が揺れそうだ。
まて、待つんだ俺。
今日は爆裂以外にも外に用事があるのだ。
その用事にアイリスを連れて行くわけには行かない。
めぐみんもちょっとアウトな気がするが、もう結婚もできる歳だしまあいいだろう。

「ああ。また明日も行くことになるだろうしそしたら連れてくから！」
「約束ですよ」
「ああもちろんだ」
「それでカズマ！出発はいつですか!?」
「もうちょっと待て。俺はまだ動きたくないから」

数時間後、俺たちは河川敷にいた。ここなら周りに特に何もないからいい。
俺たちは河川敷の横の道路に面した爆裂魔法の被害からギリギリ逃れられそうな民家の塀の中から河川敷を見ていた。
「敵感知と潜伏だったかしら…本当にすごいわね…」
ここに着くまでこれといったゾンビとの戦闘もなく、河川敷までやって来た。
因みに散々反対して来た佐倉さんは結局妥協案として俺たちに付いてくることになった。
「じゃあさっき説明した通りに、俺たちはここで待機。そしてダクネスがこの辺りを歩き回ってあたりにいるゾンビを『デコイ』で引きつけてここまで連れてきてくる。そしてある程度引きつけたらダクネスはこっちに戻って来てくれ。そして俺はダクネスの

移動の邪魔になりそうなゾンビを狙撃。それで合図したらめぐみんは爆裂魔法を撃つ。いいな」

そもそもなぜゾンビを集めるかと言うと、最初に周りのゾンビを爆裂魔法で消し飛ばしておいて後から来るゾンビが集まるまでの時間を伸ばすためである。

「わかりました」

「わかった。ああ、たくさんのゾンビに追いかけ回されるのはどのような感じなのだろうか…いってくる！」

ダクネスは顔を赤らめてにやけながら走っていった。

「あの、見間違えじゃなかったら…なんかダクネスさん笑ってなかった？」

「あいつドMの変態だからな。ていうか昨日散々見てただろ」

「あー…」

昨日のダクネスを見てればあいつが救いようのない変態だってのはわかってるはずなんだが。

因みに俺は佐倉さんに敬語を使うのをやめた。そもそも俺今巡ヶ丘高校の生徒じゃないし。もっと年上の年齢不詳の女神やリッチーにも初対面の時からタメ口だし。

でも、この人はエリス様以外で初のまともな人っぽい雰囲気を持ってたからさん付けにすることにした。

それにしてもなんかこの人年上っぽい感じしないんだよな。
そうして何分か喋ったりしてるうちにダクネスが帰ってきた。
「よし、めぐみん！ダクネスが帰ってきたから爆裂魔法を準備しろ！」
「はい！」
「お、ダクネスの前にも何匹かいるな。『狙撃』っと」
ダクネスが川を渡りきってこっちに近づいてきたので潜伏スキルを解く。
もちろん敵感知はそのままだから後ろから不意打ちくらう事はない。
「ハアハア。カ、カズマ！何匹ものゾンビが、私の前に欲望に赴くまみ腕を伸ばしてきてだなこれがなんとも…うぅんっ！」
「よしわかった。お前はとりあえずそのだらしなくなってる顔をどうにかしろ」
「だ、だらしない顔などしていない！」
このゾンビたちは足が弱いのかダクネスが引きつけてきたゾンビはほとんどが河川敷の坂で足を取られて転げ落ちている。
「やれ、めぐみん！」
「ええ！三日ぶりの我が愛しき爆裂魔法をお見せしましょう！『エクスプロージョン』!!!!」
河川敷の川辺で転んで唸っていたゾンビの山の中心に爆裂魔法が炸裂する。

そして凄まじい爆風が吹き荒れた。

「」

佐倉さんは完全に固まっている。

確かに爆裂魔法は凄まじい威力だ。爆裂魔法が当たったところのゾンビは跡形もなくなって、そこにはクレーターができてちょっとした池みたいになっている。

「ふっ、慈は我が爆裂魔法の力に驚き声も出ないようですね。それでカズマ今日の爆裂は何点ですか？」

「今日の爆裂は九十五点！威力はもちろんのことだが、周りにいたゾンビを一掃する実用性もある。これで芸術点があればさらなる追加点を与えていたところだ」

「まあ、今回はゾンビが大量にいたせいで芸術性なんてかけらもありませんでしたから仕方がないです。それでもこれは久しぶりの高得点です、今日はいい一日になりそうです！」

俺は満足げに倒れているめぐみんに最低限動けるだけの魔力を渡し、固まっている佐倉さんを現実に戻した。

佐倉さんは未だに呆然としてるけど歩くことくらいはできるだろう。

「よし。撤収」

俺たちは行きと同じように、潜伏スキルを使ってその場を離れた。

佐倉さんもいることだし、途中のレンタカーの店の跡地でレンタカーを無期限で貸してもらっていくことにして、俺たちはついでに入口のフリーズで固めたゾンビのバリケードを普通ものに変えるための資材を集めることになった。

何せあの爆音である。市内のゾンビたちは街灯に集まる虫見たく集まっていることだろう。

建物でゾンビ化して外に出れなくなった奴ら以外はほとんど道中では見なかった。

作戦通りだ。

ここら一帯にゾンビはそうそういない。帰り道も安全だ。

あいつらは生前の行動に引っ張られてるらしいし、効果はそこまで長くは続かないだろう。

でも、もし明日もあの位置にわらわらと群がっていたら爆裂させてやろう。

それはそれとして、資材は資材で後で取りに行くが、その前に俺にとっての本来の目的地である、近場のレンタルビデオ店に来ていた。

学園生活部の連中は娯楽に飢えてるだろうし、俺も俺でアレが限界だし。

「じゃあ三人はその辺でゲームなりＤＶＤなり探してくれ。俺はあっちに行ってくるから」

と言って俺はＲ１８マークのついた暖簾を指差した。
「か、カカカカカズマくん!?何を言ってるの!?しかもめぐみんさんみたいな小さな子の前で!!」
「おい、私が小さいとか言うその言葉について詳しく聞こうじゃないか！」
「あ、めぐみんさんごめんなさい!!だから待って摑みかからないで！」
案の定佐倉さんは顔を真っ赤にし、そして地雷を踏まれためぐみんは佐倉さんに向けて紅く目を輝かせて、ダクネスは何かを察したらしい。
「おいカズマあそこに何があるのだ」
「エロいＤＶＤ」
俺は素直に答えた。
「少しは取り繕ったりしたらどうなんだ。しかし普段家でだらだらしてるお前が外に出ることに妙に積極的だと思ったら理由はコレか」
こいつはさも呆れたように言っているが、そもそもお前がこれを取りに行かせた原因だってことをわかっているのだろうか。
「そうだよ悪いか。言っておくが、最近特にお前らは心臓に悪い行動とる上に盛り上げといてお預けするなんていう等の悪い行動とるからだからな。男ってのはアレがああなると辛いんだよ」

そして、その度にサキュバスのお姉さんたちがやってる店にこっそり行ってどうにかしていたのだ。
「じゃあ俺はちょっと行ってくるから」
「わかった。しかし、くれぐれもそこから持って行くものをアイリス様には見せるなよ」
「わかってるって」
そうして、俺は暖簾の中に入って行った。普段ならもう少しダクネスをからかってやるところだが、俺にそんな余裕は既にない。
そこに広がるのは約二年ぶりに広がる現代の楽園だった。
眼に映る肌色の中から慎重に吟味して、俺好みのものを貸し出し用に使われてたのであろう袋の中に突っ込んで行く。
この世界にはサキュバスがやっているあの素晴らしいお店がない。だから次善の策でここに来たわけだ。
みんなが賢者タイムなら争いなんて起こらない。
それにしても流石の品揃えだ。結構数が多いな。それに小型の再生プレイヤーも持ってかなきゃいけない。
「よし、こんなもんだな。向こうに帰ったらアクセルの外に住んでる日本人転生者かダストあたりに高値で売れるだろうし、また取りに来るか」

きっと電池の問題はバニルあたりがなんとかしてくれるだろう。もしかしたら紅魔族とかならプレイヤーを魔道具として作れるかもしれない。

そう考えつつ俺は暖簾の外に出た。

その後は、普通にゲームを選んで資材をとって帰った。

このぞんぞんな世界で日常を！

こっちに来てから一ヶ月くらいたったある日

「珍しいわね、佐藤くんがこんな朝早くから起きてるなんて」

俺が食堂に行くと若狭が声をかけてきた。

「今までずっと徹夜してただけだよ。今日みたいな暑い日はキンキンに冷やした部屋で惰眠を貪るに限る」

「また徹夜でゲームしてたのね。これだからヒキニートは」

校舎内に『自由な』ゾンビが完全にいなくなって、学校周りをバカでかい城壁でアクアが囲んで安全になってからずっと昼間から飲んだくれてるこいつにだけは言われたくない。

「夜更かしはダメよカズマくん。と言うかあなたはゲームのやり過ぎです。夜更かしは身体に悪いのよ。そうだ、ここはみんなと一緒に勉強でもすれば夜も眠たくなるしいことづくめ…」

めぐねえがなんか言ってるが俺は気にしない。

俺は佐藤和真。親から何を言われても動じずに居続けた男。たかが教師の戯言に流

されて辛い道を行くなどという愚行は犯さない。
　ちなみに佐倉さんの呼び名は今度はめぐねえに変わることになった。なんかみんなそう呼んでたし俺もそう呼ぶようにしたのだ。
「というかお前は最近武器の整備すらしてないじゃないか。帰ってから困るぞ」
「俺もう冒険者は引退してこれからは堅実に生きていこうと思うんだよ。ほらもう一生遊んで暮らせるだけの金稼いでるわけだし」
「またいつかみたくトチ狂ったこと言い出しましたよこの男」
「お兄様は冒険者を辞めてしまうのですか？」
　アイリスの悲しそうな眼を見ると言ったことを捻じ曲げそうになるが、そもそも俺は魔王を倒した勇者だぞ。
　そういうのって冒険終わったらちやほやされながら遊んで暮らすって相場が決まってるもんだろ。俺はちやほやされた覚えはほとんどない。だから遊んで暮らすくらいはやらないと割に合わない。
「ねーカズマがニートなのは今更だし、今はそんなこといいじゃない。遊んで暮らせるならそれはいいことだと私も思うの。それはそうと今日の夜も暑いらしいからあとで氷作ってくれる？」
「まあそれくらいはいいけど、そう言えばお前こそ今日早いじゃないか」

「なんかゼル帝にごはんあげないとって思ったら早く起きちゃったのよ。ああ、あの腐れ悪魔のところにいるゼル帝が心配だわ」
　そういやこっち来てからもうかなり経ってるな。
　ゼル帝もそろそろこいつの顔を完全に忘れてるんじゃないか？
　まあ、元々突かれたりとかはしてたけど。
「ねーアクアちゃん、そのゼル帝？って誰？」
「ゼル帝はね、この私が卵の時から魔力を与えつつ育てて来たドラゴンなのよ！まだ子供なんだけど、すっごい魔力を持ってるんだから」
「本当に!?すごいねー！」
　そんな話を横目に席に着くと、恵飛須沢がこっちに寄って来た。
「なあ、ドラゴン飼ってるとか言ったけど…マジで？ていうかそっちの世界にはドラゴンとかいんのかよ」
「ドラゴンはいることにはいるし、実際アイリスとかマジでドラゴンを倒したからドラゴンスレイヤーなんて呼び方されたりしてる」
「マジでか…ってことはそのゼル帝ってのはマジでドラゴンなのか!?」
　期待してるとこ悪いがゼル帝は断じてドラゴンなんて高尚なものなんかじゃない。
「いや、ゼル帝はただのニワトリだ。アクアの奴がこれはドラゴンの卵だって言われて

大金叩いて買ったらしい」
「つまり詐欺にあったと…言ってやれよ…流石にずっと知らないってのは可哀想だろ」
「言ったぞ。でもあいつはゼル帝がニワトリだってことを頑なに認めようとしないんだよ」
まあ、最近のゼル帝の鳴き声は朝には欠かせないものになって来てるし、全く役に立たないってわけでもない。
あとゼル帝がいるとアクアがあんまりアホな行動しなくなるから助かるしな。
と、そんなことを考えてたらアクアがこっちを見て反論してきた。
「ふんっ。そんなこと言ってゼル帝のことバカにしてるといつか立派なシャギードラゴンになった時、食べられちゃっても知らないんだからね」
ダメだこいつはもう救いようがない。
見ると、ダクネスやめぐみん、だけじゃなくクリスやアイリスまで可哀想なものを見る目をしてる。
「あと、向こうの世界の俺たちの屋敷には力を封印された邪神とかもペットとしている」
「おいおいそれは流石に冗談だろ？」
「本当ですよ。今はちょむすけという名前になっていますがあの子は元々はウォルバクと言う名前で、私の故郷の紅魔の里に封印されてた邪神です」

「もうめぐみんのネーミングには突っ込まないけどさ、なんでそんなのがペットなんかになってるんだよ」
「昔私が封印を解いてしまいまして。まだ力が完全だったちょむすけに襲われたのですが、その時はとあるお姉さんに助けられ事なきを得ました。けどその後にこめっこ…私の妹が封印を解いてしまいまして…その後、なんやかんやあって家のペットになってます」
「ってちょっと待ってくださいめぐみんさん！ウォルバクって確か魔王軍幹部の…」
うちの羽が生えた謎猫…もといちょむすけの話をしていると、アイリスが話に入ってきた。
そういやその辺のことは言ってなかったか。
「魔王軍幹部の方のウォルバクはちょむすけの半身なんだよ。ちなみにまだ邪神としての力が封印されてなかった時のちょむすけがめぐみんを襲った時に助けたお姉さんってのがそいつらしい」
「ええ。そして彼女は我が爆裂道の原点と言うべき存在でもあるのです！」
「へえ～」
「じゃあそのウォルバクさんって方がめぐみんさんの憧れの人なのね」
めぐねえも会話の中に入ってきた。

なんかこの人最近影薄くなってる気がするな。
「あれ…？でも、ウォルバクを討伐したのってめぐみんさんじゃ…」
「そこには一日では語れないことがあったのですよアイリス。止むに止まれぬ事情があったとはいえ、恩人をこの手にかけることになってショックを受けた私は少し自棄になってカズマと一線を越えようとしたりもしましたが」
「ちょっと待ってください！そこのところ詳しく！」
「まあ、結局何事もなかったのですが。けど、あの時一線を超えてれば良かったと思うことが最近多くなりましたね」
「そんなことは私がいるうちは絶対にさせませんよ！」
めぐみんとアイリスがまた騒がしく言い合いを始めていた。
うん、毎回思うけどなんかいいな、コレ。
そしてこの流れに恵飛須沢たちも慣れてきたのか二人の喧嘩を止めようとする人は誰もいない。
「あたしも聞きたい事あるんだけどいいか？」
「どうした恵飛須沢」
「ウォルバクって邪神の事とめぐみんの関係とかはよくわかったしいいけどさ、そもそもなんでめぐみんの故郷にそんなのが封印されてんのさ」

「それはですね、我々の御先祖様が邪神との激戦をくり…ひろ…げ…」
「おいどうしたよ。邪魔しないからその先を言ってみろって」
そう言いながら俺はめぐみんの顔を至近距離でじっと見つめる。
そしてアクアとダクネスも。
嘘を吐くとチンチン鳴る魔道具があったら鳴っていただろう。
つーか真実を知ってる奴が三人もいるのによく嘘つく気になったな。
「……。『邪神が封印されてる地って何だか格好いいよな』と誰かが言い出し、どこかの誰かが封印した邪神を勝手に拉致し、里の隅っこに再封印して観光名所にしたのです」
「お前らの先祖何やってんの!?」
他にもマイナーな女神を封印したり、魔王の娘の部屋を覗ける望遠鏡を観光名所にしたりとやりたい放題な奴らだったりする。
「なあ、めぐみんたちの一族ってみんなあんななのか？」
「ああ。流石に紅魔族の中でも爆裂魔法はネタ扱いらしいが、それ以外の感性はめぐみんとそんな変わらない」
「なんか思ってたのと違うな…」
恵飛須沢は邪神の封印とかもさっきめぐみんが吐こうとした嘘みたいなのを想像し

てたんだろう。
事実はこの上なく下らないけど。
その気持ちはよくわかる。
「みんな、朝ごはんできたから話は終わりにしてそろそろ食べましょう」
そしてみんなして飯を食って、その後俺は当初の予定通り惰眠を貪った。

『エクスプロージョン』ッッ！」
いつものように爆裂魔法の轟音が鳴り響く。
ただ、最近はもうゾンビが寄ってこない。
多分近くのゾンビのほとんどが爆裂したんだろう。
「今日の爆裂は八十点な。衝撃のビリビリとした感覚がいつもより少なかった」
「くっ、確かに今日は少し調子が悪かったです」
「違いがわからねぇ」
「ふっ爆裂ソムリエとしてはまだまだな恵飛須沢も」
「ええ、ですがクルミも私たちの爆裂散歩についてくる内に良し悪しがわかるようになるでしょう」
「そもそもそんなもん目指してないんだけど、毎回やってんだなそれ」

「それじゃあ今日の爆裂も終わったし、探索に行くか」
最近は潜伏スキルすら使わなくなった。
というかそもそも移動は車だ。めぐねえに教わってからはもう徒歩で行くことは殆どない。
「あ、そういえばりーさんが野菜の種探して持って帰ってきてくれってさ」
「了解。じゃあホームセンターも寄るってことでいいな」
ゾンビゲーなら外に出るだけで命がけだが、俺たちの場合はそうじゃない。
爆裂狂のめぐみんはともかくとして、俺にはクリエイトウォーターとフリーズのコンボで大抵どうにかなるし、ダクネスは筋肉が硬すぎてそもそもゾンビの歯が通らない。
アイリスは言わずもがなだし、そもそも感染してもアクアがいる限りどうとでもなる。
さらに拠点の学校では、元からある発電装置に加えて、俺が自動車のバッテリーを使って作った蓄電装置のおかげでゲームはやり放題だし、食料も集めれば豊富。
ぶっちゃけアクセルの街にある屋敷にいた頃よりも快適だ。
何よりモンスターもいなければクエストもない、ずっと引きこもってられる。
サキュバスのお店がアクセルになかったらきっと俺はここで年単位で暮らすことを選んだはずだ

「なんかあたしたちが毎日ビクビクして暮らしてたのが嘘みたいだ…」
「なんだよ藪から棒に」
「お前たちがこっちにくる前はさ、こんな風に外に出歩くなんて考えられなかったからさ」
　確かに、来たばっかの時とかは学校内はゾンビが歩き回ってる上に所々血の跡がついた、見たままゾンビものの映画とかゲームとかの見た目だった。
　そう考えると、パンデミックが起こる前に死んで、転生して、魔王の討伐金やらバニルに売った知識やらで楽に暮らせてる俺はマジで運が良かったのかもしれない。
「お前たちが来てからこうやって毎日笑いながら面白ろおかしく暮らしてる。なんか夢みたいだ…」
「私たちもこっちに来てから学校に着くまではギャーギャー言いながら必死に逃げましたけどね」
「そうなのか？」
「確かにアクアの浄化魔法が効かなかった時は結構焦った」
　もしかしたらまた死んで今度はアクアの代わりに死者の案内やってる天使にあってたかもしれない。
「まあでもなんだかんだいつも通りな感じだったな」

向こうでも似たような感じだった。
厄介なことに巻き込まれてたまに死んで。
今回は死んではないけど、なんで俺はこう厄介な出来事に巻き込まれるのか。
「まあ、ダラダラ出来るうちはダラダラしとけばいいんだよ。向こうに帰ったら帰ったで、面倒臭いことになるのは分かり切ってるからな」
もし、国家反逆罪みたいなのにされそうになったら本格的に今は別荘となってる魔王城に引っ越すとしよう。
「おっ、この辺の道確か知ってるとこだ。この辺に酒屋があったはずだからいくつか拝借してこう」
この辺りは本当に俺の家に近かったはずだ。
寄ろうとは思わないが。
だからこの辺の店屋は割と知ってる。
「お前、まあアクアもだけどさ。今更飲むなとは言わないけど二日酔いになるまで飲むのはやめた方がいいんじゃないか？そろそろめぐねえが本気でキレそうだぞ」
「大丈夫だ。もし仮に酒を取り上げられても俺にはスティールがある」
敢えてスティールで何を奪るかまでは言わない。そもそもランダムだしな。
そしてめぐみんの俺の見る目がゴミを見る目になった。

「前に、お前がそのスキルを女に使うと９９％パンツ奪るって言ってなかったか？」

俺は無言で恵飛須沢から目をそらした。

恵飛須沢の目もゴミを見る目だった。